

一寸のペンの中の虫

「朝日新聞」を遠く離れて

第3回

ノンフィクション作家
三山 喬

ミニ支局の新人記者時代

一九八五年四月。入社式以来一週間ほど続いた研修期間を経て、私たち新規採用の記者たちはそれぞれに、各県の赴任先へと散らばっていった。

私が配属されたのは、埼玉県熊谷市の北埼玉支局。通常、新人記者は各県の県庁所在地支局に送られるが、当時は採用人数が比較的多かったため、複数の新人が

重なった県では、出先の小支局に回されるケースも珍しくはなかった。

埼玉の場合、拠点の浦和支局には十人以上の記者が置かれたが、熊谷は支局長を含め総勢三人の「ミニ支局」。局舎の二階には支局長住宅があり、ぱっと見の外観は、住宅街に溶け込んでしまう一軒家だった。

着任したその日の情景は、三十年を経てもなお、鮮やかに記憶に残っている。

大荷物を抱えてドアを押し開けると、目の前のソフ

アに横たわり、週刊誌を読む初老の支局長がいた。そして、ずり落ちた老眼鏡の上方から私を確認して、「おお、来たか」とおもむろに体を起こしたのだった。

部屋の中央には、「六角」と呼ばれる正六角形をした木製の大きな机があり、その周囲に事務椅子が三つ。電話機も三台置かれていた。支局長以下三人の記者たちが、この六角を共有した。隣は暗室になっていて、各人が取材先で撮影したモノクロのフィルムは、自らがその都度、現像することになっていた。

パソコンもワープロもまだ使われていない時代。記者たちは、十四文字×五行の原稿用紙に鉛筆で原稿を書き、浦和支局にいる県版の責任者「デスク」にファクスで送信した。デスクのチェックを経て完成した原稿は、「パンチャー」と呼ばれるオペレーターが専用の端末を操作して入力、本社のコンピュータシステムに送信する流れになっていた。

全国ニュースとなる大事件でもない限り、私たち北埼玉支局員の仕事は、管内の話題を記事にして「北埼玉版」を埋めることだった。秩父市に置かれた通信局（駐在記者ひとりの取材拠点）の記者を合わせても計四人の小所帯だったため、丸々一ページを完全に埋めるの

は無理だったが、県内他地域から流用する記事は極力少なくして、なるべく「地ダネ」を多く載せることが求められていた。

そう、県警や県庁に複数の記者を配置して、重要ニュースを追う県庁所在地支局とは異なり、私たち出先の記者たちには、市町村のちょっとしたイベントや恒例行事などを手際よく記事にすることが、平時に求められる日常業務だった。

ひと通りの記事のまとめ方を身に付けてさえいれば、出先での仕事は楽なのだが、ベタ記事の書き方ひとつ知らない新人が紛れ込んでしまうと、「地ダネ」の出稿本数はきめんに減る。

実際、熊谷にいるライバル紙の顔ぶれは、いずれもシニア記者ばかりで、駆け出しの新人は私しかないなかつた。

ただ、そんな「お荷物」を押し付けられたにもかかわらず、我が支局長ともうひとり、入社五年目の先輩は、ローカルネタの量を一手に引き受けてくれ、私にはオーソドックスな「新人記者としての動き方」を指導してくれた。

新人が学ぶべきルーティン。つまりはサツ回りであ